

「子どもを祝福する」

2014年10月07日

マルコによる福音書 10章 13節～16節。イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきりしておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

当時、ラビ（宗教家）が通りかかると、ラビから子どもに手を置いて祝福してもらう習慣があった。母親たちは主イエスを見て、子どもたちをいつものように祝福してもらおうと連れて来た。ところが、弟子たちは来るなど叱りつけた。なぜであろうか。主イエスとファリサイ派の人々との間で、結婚、離婚という大人の律法問題で深刻な議論がされていた。また、女性と子どもは数に入れない「軽い存在」と見なされていた。今、子どもの来る時ではないと排除したのである。ところが、主イエスは弟子たちの仕打ちに憤り「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」と厳しく咎められた。そして「はっきりしておく（アーメン レゴ）」と特に重要なことを言う場合に使う言葉を用いて「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」と言われ、子どもたちを抱き上げ、手を置いて祝福された。この場は一気に和らぎ、子どもを中心にした微笑みが交わされる雰囲気変わっただろう。主イエスの周りは、このような明るさで満ちていた。

主イエスは神の国は子どもたちのものであると、子どもたちを無条件に受け入れられた。子どもは「汚れなき存在」と言われたのであろうか。そうではないだろう。子どもは無垢に見えるかも知れないが、子どもは自己中心である。それは、弱い存在であるから、自己中心でないと生きられないからである。また老人も弱くなって、自分のことしか考えられず、自己中心になっていく。人間が大人になっていくと他者の存在が視野に入り、受け入れていく。他者を見ないで拒絶する人は成長していないということである。

子どもは自分の弱さを知っている。幼稚園々長を数年したことがある。子どもたちに神様のお話しをすると、100%信じる。「神様なんか、いない」という子どもは一人もいない。子どもは両親や周りの人に守られていることを知っている。更に大きな、天地を造られた「愛」の神の守りの中にあることを教えると、喜び、安心して、神を受け入れる。主イエスが「神の国はこのような者たちのものである」と言われたのは、この意味であろう。

その子どもも小学生の中、高学年になると、力と知恵がつき、神の存在への不信が沸き起こってくる。当然である。不信の中から懷疑を乗り越えて、大人の信仰は芽生えてくる。その信仰も自分の弱さ、有限を知り、手痛い行き詰まりの経験から出発することは宗教的真理であろう。子どもの頃、教えられた神の守りの中にあるという喜びと平安の体験が、不信から信仰への道を開いていく。子どもの教会、キリスト教主義学校で学んだことから信仰に復帰する人は多い。信仰は生きることを肯定することで、それを体得する幼児期の宗教教育は大切である。